はじめに

学校の裏山にも近所にできた空き地にもフェンスが張り巡らされ「危険！　立ち入り禁止」の看板が立てられています。公園では「ボール遊び禁止」「火遊び禁止」のみならず「大声を出さない」という看板までもが子どもたちをにらみつけています。

いま、子どもたちはいったいどこで遊べばいいのでしょうか。これじゃ、まるで子どもたちは社会の邪魔者です。

本書の第四章に登場する放課後ＮＰＯアフタースクールという団体が二〇二三年に行った調査結果によると、小学生の約七割が「放課後に友達と遊ぶのが週一回以下」と答えました。ほぼ同数が「もっと友達と遊びたい」とも答えています。

思うように遊べない理由は主に「時間がない」「仲間がいない」「空間がない」。いわゆる「三間（さんま）」が足りていないということです。

都市部だけの話ではありません。むしろ地方部のほうが、友達と遊ぶ機会も外遊びの機会も少ないというデータすらあります。

子どもたちがあるがままに世界を感じ、遊び、恐れおののき、それぞれにとっての学びを得ていく機会や環境がいま、どんどん奪われています。

では、何が子どもたちからそのような機会や環境を奪っているのでしょうか。自分のことしか考えられない大人たち、そしてそれを説得できない地域の大人たちや行政のひとたち……。たしかにそういうひとたちもいますが、ごく一部です。

私が思うに、子どもたちから大切なものを奪っている元凶は、社会の「呪い」です。

能力を詰め込む器のように子どもをとらえる子ども観。ＯＥＣＤ（経済協力開発機構）的〝できるひと〟像からリバースエンジニアリング（逆設計）された教育観。公平な競争という幻想を前提にした社会観――。あまりに当たり前のものとして受け入れられているので、多くのひとは、呪いにかかっていることを自覚すらできません。

この呪いを子どもたちから少しでも遠ざけておこうとする大人たちがつくる社会を、子どもが子どもでいられる地域社会と呼ぶこととします。そういう社会の実現が本書の目的

です。

そこで、子どもが子どもでいられる地域社会を全国で同時多発的に甦らせるための起爆剤になり得る五つの具体的な活動の理念・実践・課題に迫ります。

第一章はボーイスカウト。彼らは単にアウトドアの達人を目指しているのではありません。キャンプやハイキング以外にも、芸術からプログラミング、あるいはチームビルディングから国際教育まで、幅広い守備範囲を担っています。学校教育が苦手とするところを見事に補う生涯教育プログラムです。

第二章は冒険遊び場。いわゆる「プレーパーク」のことです。穴を掘ったり、火を起こしたり、刃物を使ったり、木登りしたり、子どもたちの想像力と創造力の赴くままに自由に遊べる場所です。少々の喧嘩や怪我は想定内。大人はいちいち口出しも手出しもしない約束です。あえて大人たちが自らを背景化することでかつての裏山の秘密基地を復興する活動ともいえます。

ボーイスカウトと冒険遊び場は、海外で考案され体系化された国際的な活動です。子ど

もが子どもらしく育つために、世界中で広く認められているグローバルな共通言語です。この二つが全国各地域に整備されれば、子どもの体験機会の欠乏やそれに伴う非認知能力の不足などということはおよそ生じないはずだと私は考えています。

しかし、このような活動が地域にしっかりと根を張るためには、それぞれの地域の事情に合わせて土壌を耕しておく必要があります。そのローカルな具体例として第三章以降があります。

第三章では全国てらこやネットワークの活動を紹介します。地域の神社仏閣を舞台に、大学生が子どもたちにさまざまなプログラムを提供しています。神社やお寺の境内で幅広い年代の子どもたちが遊び、ときどき神主さんやお坊さんに戒められる——懐かしい風景の復興ともいえます。この活動には実は強力な後ろ盾があります。それが現実的に、子どもたちの世界と市場経済の距離感をうまい具合に保つ機能を果たしていることも見ていきましょう。

第四章は放課後ＮＰＯアフタースクールという事業の紹介です。放課後のチャイムが鳴

って以降は学校から学校っぽさを引き算し、代わりに地域の市民にも入ってもらって、子どもたちがのんびり遊びながら、プチ習い事のような体験までできる場所にする取り組みです。現在国が掲げる子どもの居場所づくりの方向性ともおおいに関係します。ここから、子どもたちが地域を回遊できるようにする糸口が見つかります。

第五章はトーキョーコーヒー。東京にあるオシャレな喫茶店……ではありません。「登校拒否」のアナグラム（文字の並べ替え）になっています。が、不登校支援というわけでもありません。結論を先に述べてしまえば、現在の教育や社会のあり方に違和感を覚える大人たちが集まって緩（ゆる）やかに世の中のムードを変えていこうという、愉快でしたたかな社会革命運動です。ここでは、社会を根底から変えるための、目からウロコの心意気が学べます。

なお、各章のおわりに、各団体の代表者と私の対談を収録しています。時間がない場合はひとまず読み飛ばしていただいても結構なのですが、ここも読むことで、各団体の考え方や本書のメッセージがより深く理解できるのではないかと思います。

これらの活動に直接的にはかかわれなくても、一人の大人として、次世代のためあるいは未来のために自分がどんな姿勢や心持ちで日々を暮らし、社会とかかわればいいのかが、本書を読むことで見えてくるはずです。

子育て中の当事者が読めば、子どもの育ちに大切なものの優先順位が見えてきて、過度な競争教育に巻き込まれにくくなるでしょう。

教育関係者が読めば、自分たちとは違うさまざまな角度や距離感から子どもたちのそばにいてくれる頼もしい仲間がたくさんいることがわかり、力が湧くことと思います。

本書が示す変革の道筋は一つではありません。本書を読み終えたとき、おそらく読者それぞれのなかに、それぞれの道筋が見えてくるでしょう。それぞれの立場でなすべきことが見えてきて、自然に心と体が動きはじめるはずです（そうなってほしい）。

ただし「問題を生じさせた考え方（マインドセット）を手放さない限り、我々はその問題を解決できない」。物理学者アルバート・アインシュタインの言葉として有名です。

そこで私自身、たくさんのヒントを夢中で拾い集めながら、大胆な思考実験をくり返すうちに、最後は、我ながら突拍子もない結論にたどりついてしまいました。地域社会どこ

ろか全世界の前提をひっくりかえす極論です。それも本の終盤で開陳します。荒唐無稽と笑われるのか、あながち的外れでもなさそうだと思ってもらえるのか……。みなさんがどう思われるか、ドキドキです。

江戸時代末期に日本に滞在したイギリス公使のラザフォード・オールコックは、「いたるところで、半身または全身はだかの子供の群れが、つまらぬことでわいわい騒いでいるのに出くわす。それに、ほとんどの女は、すくなくともひとりの子供を胸に、そして往々にしてもうひとりの子供を背中につれている。この人種が多産系であることは確実であって、まさしくここは子供の楽園だ」と記しています。

世間ではよく「昔の親はもっと厳しかった」と言われますが、それは明治以降、日本が「富国強兵」を掲げて欧米列強のやり方をまねて、軍隊と学校を整備してからのことにすぎません。本来、日本のしつけはたいへんおおらかであり、子どもたちは自由に野山を駆け回り、あるがままの姿で生きることが許されていました。

現在の〝グローバルスタンダード〟とは、ヨーロッパのローカルな価値観や生活様式が

近代以降に世界中に伝播したものです。その結果が、大規模戦争であり、気候変動であり、経済格差です。合理化、効率化を最優先する思想が先鋭化しすぎて、地球上から余白や贈与がどんどん消えていきました。そうやって子どもたちの生きる世界が痩せ細っていきました。

オールコックが目撃した「子供の楽園」であったころに時代を巻き戻すわけにはいきません。でも、そのころの子どもに対するおおらかな視点さえ大人が取り戻せれば、地域社会をつくり直すことは十分に可能なはずです。

目次

はじめに ―― 3

序　章　暴走する個体能力主義 ―― 19

「子どもは社会の宝」の三つの意味／保育現場のおおらかさと親の焦り／
親の恐怖の正体は？／武装としての教育／個体能力主義が教育界を席巻／
非認知能力と体験消費社会／それをお金で買いますか？／子育ての家庭依存が強まる／
学びから躍動感と喜びが剝奪される／子どもたちの自己像が歪められる／
強迫性障害を助長する体験格差ビジネス／コロナ明けから学校外教育費支出の差が拡大／
なんでもお金で解決しようとする癖／子どもの夢ややる気への応援は絶対必要／
贈与としての学びを復興する

第一章　ボーイスカウト ―― 41

ＮＡＳＡ宇宙飛行士の三人に二人が経験者／修得課目は日常生活から国際教育まで／

さまざまな興味関心に対応する選択課目／専門家よりも知恵を貸す大人が必要／
ボーイ隊から本格的なアウトドア／モンテッソーリとシートンの思想をブレンド／
ロンドンの子どもたちのごっこ遊びから始まった／最強の非認知能力パッケージ!?／
戦前はイギリス流、戦後はアメリカ流／虫嫌い克服のために参加!?／
うまくいかない状況を楽しむ子どもたち／保護者はここでは叱らなくていい／
課題に取り組ませても教えない／三つの「ちかい」と八つの「おきて」は世界共通／
大ピンチでも笑っていられるひとになる／内的動機の喚起が指導者の腕の見せどころ／
世界大会には四万人以上が参加する／孔子的な子育てと荘子的な子育て

対談　一　ボーイスカウト日本連盟　総コミッショナー　**木村寿宏さん**

日本国内の会員数は全盛期の四分の一／知識や技能の習得は目的ではない／
子どもの当事者意識がなければ意味がない／大人の不安から逆算された「いま」／
生きる力は本当に学校で育てられるのか?／ボーイスカウトで入試を突破する方法!?／
しあわせな人生について発信する

第二章　冒険遊び場

すべての子どもが自由に遊ぶことを保障する／デンマークで発明されイギリスで発展／

一九七〇年代に日本でも話題に／変わったのは子どもではなく大人たち／
大人たちの意識を変えるプレイワーク／すぐに「危ない」「ダメ」と言わないで／
間違ったやり方をしていても大人は見守る／
保護者も子どもの意思を尊重した言葉遣いになる／「この基地に完成はない」／
場全体を見て柔軟に対応するプレイリーダー／
市民活動からプレイステーション条例が誕生／夕方以降は中高生たちのたまり場に／
普通の公園で出張型の冒険遊び場も／一カ月に一週間だけ開催される期間限定型／
保護者たちもキャッキャと騒ぎ出す／大人が遊び相手しすぎることのマイナス面とは？／
プレーリーダーは場づくりの達人／子どもの試行錯誤を邪魔しない／
ダメと言わずにすむ方法を考える／リスクは歓迎、ハザードは除去／
地域のみんなでリスクとハザードを仕分けする／体験は与えられるのではなく訪れるもの／
苦々しいこともすべてが体験／子どもはノモスとピュシスを往還する

対談　二　日本冒険遊び場づくり協会　代表　**関戸博樹さん**

「こどもの居場所部会」設置が追い風に／利用者の低年齢化が進んでいる背景とは？／
プレーリーダーのトレセンをつくりたい／社会教育に予算がつきにくい構造的理由／
暴力動画が出回る背景に育ちの問題／サービス化で責任追及の風潮が強くなる／
冒険遊び場づくり遊びを大人が遊ぶ

第三章　てらこや

子どもが育ちやすい地域社会の土壌を育てる／円覚寺境内で二〇年以上続く朗読会／現場を仕切るのは大学生たち／世代をまたいだ班で小泉八雲を朗読／休憩時間の余白にこそ子どもにとっての魅力がある／放課後や週末にいつでも行ける場所がある／大学生たち自身が楽しんでいる姿がいい／不登校が起こらない社会をつくり直すために／中小企業の若き経営者たちを巻き込む／全国二〇カ所で同様のしくみが展開／神社仏閣も大学生も経営者も三方良し／グローバルな市場原理とは別の原理で地域を回す／体験の意味はあとになってわかればいい

対談　三　全国てらこやネットワーク　創始者　**湯澤大地さん**

大人がリスクテイクしないと子どもは信じない／余剰を贈与し合えば地域のみんなが豊かになる／中小企業の経営基盤強化にもつながる

133

第四章　アフタースクール

「あそこに行けば誰かに会える」をもう一度／放課後の学校を市民と子どものふれあいの場に／国が「放課後児童対策パッケージ」を推進中／

161

学校の一角にアフタースクール専用スペース／サッカーも英語もプログラミングも習える／
私立学校導入例ではお金がかかるのが難点／公立小学校でアフタースクールモデルを導入／
余白がなければ居場所じゃない／地域を回遊するホームベースになればいい／
学校のまわりになわばりを再生する／学校の中と外の両方を充実させる視点を

対談　四　放課後ＮＰＯアフタースクール　代表理事　平岩国泰さん

居場所づくり支援に力を入れていく／こども家庭庁ができて追い風が吹きはじめた／
学校を助けることはあっても迷惑はかけない／
放課後人材がちゃんと食べていける世の中を目指す／
大人のちょっとした一言でも子どもの居場所はできる

第五章　トーキョーコーヒー

放てば手に満てり／きっかけはコロナ禍の息苦しさ／つくるを通していきるを学ぶ／
安心と自信を取り戻せば意欲が湧く／子どもたちに必要な体験は勝手に訪れる／
子どもの成長に目的なんて必要ない／三年間で四〇〇拠点以上に拡大／
味噌づくりともんじゃ焼きのために集まる／東京下町の井戸端会議を再現／
永遠に終わらないリノベーション

対談　五　トーキョーコーヒー　代表　吉田田タカシさん

プロセスしか推奨していない／各拠点を運営維持するお金が足りない／
日本をシンガポールにしないために／ソサイエティ6・0は「やめていい社会」／
気づいたら社会がアップデートされてる／中央から渡される画一的教育はいらない／
地域のひとがアレルギーを起こさないために／余白は秘密にしておくほうがいい

終　章　公園と駄菓子屋が甦る

森のようちえんと冒険遊び場の共通点／日本には武道や茶道のような修行もある／
経済と政策と意識がそろえば社会が動き出す／世界的破綻へのチキンレースを止める／
近代という袋小路から抜け出すには？／余白と贈与で子は育つ／
肥大化したノモスに対するピュシスの反逆／学校依存社会はもろい／
フリースクールも地域社会のインフラ／モザイク模様の学び環境で教育をカスタマイズ／
パラダイムシフトにまで段取りを求める呪い／念ずれば花ひらく／
人類として〝学校〟を卒業する／脱出ゲームという遊びかもしれない

おわりに 247
参考文献 259

本文中の情報は執筆時（二〇二六年春）のものです。

写真撮影／おおたとしまさ
図表・章扉作成／ＭＯＴＨＥＲ